# 国際看護論におけるリアクションペーパーの記述内容に基づく授業形態別の学びの可視化

Visualization of learning by class type based on reaction paper content in global health nursing classes

○松尾まき[1], 中山純果[1], 山本純一[1], 大堀美樹[1]
Maki Matsuo, Junka Nakayama, Junichi Yamamoto, Miki Ohori
1　東京医療保健大学医療保健学部
Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

## 【背景と目的】

本大学の医療保健学部看護学科では、1～3 年生に対し選択科目として国際看護論を開講している。この科目を受講した学生が能動的・積極的に授業に参加しているか実態を把握するために、授業形態別による学生と学びの類型について関連構造を明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

同意の得られた 11 名のリアクションペーパーについて、授業形態別（講義、グループワーク、プレゼンテーション）での分析を行った。リアクションペーパーの記載についての教示は、「講義内容から考えたこと、グループワークで他者の意見を聞いて考えたこと、授業に取り組んだことで考えたこと、自分の意見などを書いてください」とした。全てのテキストデータの記述内容に基づき、原文の具体性を保ちつつ意味単位で区切り、授業のトピック、そのトピックについての詳細な記述、そこに介在している学びの種類（学びの類型）で構造化されたデータに変換した。学びの類型は須田（2017）の先行研究を参考に 7 個に分類した。授業中の出来事をそのまま描写する『事実』、授業の内容に「～がわかった」「～がわからなかった」の一言を付す『理解＋』『理解－』、個人的経験・既習事項など過去の自分と結びつける記述の『過去』、「これから～したい」という将来の見通しの記述の『願望』、授業をもとにした自分なりのオリジナルな記述の『思考』と『疑問』である。次に記述内容を集約しクロス集計表に整理し、最後に学生と学びの類型について授業形態別に対応分析を実施した。なお関係の強いデータ要素同士は近く布置され、原点（縦軸と横軸の中心）付近に布置される要素は特徴が薄いと解釈される。対応分析には Python パッケージ MCA 1.0.3 を用いた。

【倫理的配慮】東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得た（教 023-16A　令和 5 年 11 月 8 日）。開示すべき COI はない。

## 【結果】

3 つの授業形態の全テキストデータは、講義型授業、グループワークを取り入れた授業、プレゼンテーションを取り入れた授業でそれぞれ 50、60、54 であった。同意の得られた全受講生の学びの類型を授業形態ごとに集計した結果を表 1 に示す。

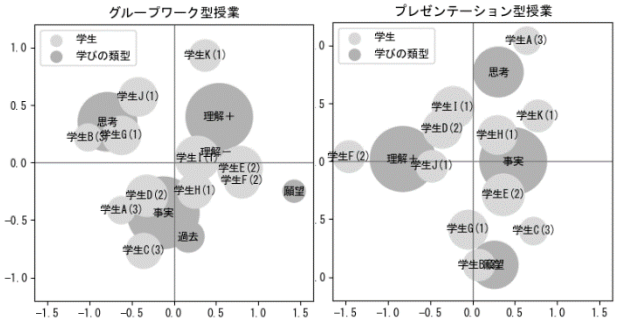
初回の講義型授業（国際看護概論、世界の健康格差等）では『理解＋』（34.0%）が最も多く、次いで『事実』（28.0%）『思考』（26.0%）であった。グループワーク、プレゼンテーション型授業ではそれぞれ『事実』（35.0%、33.3%）『理解＋』（30.0%、31.5%）『思考』（23.3%、18.5%）の順に多かった。『過去』についての記述は、グループワーク型で 6.7%、講義型で 4.0%、『願望』の記述は、学生によるプレゼンテーションを取り入れた最終授業で最も多く（16.7%）、次いで講義型（6.0%）、グループワーク型（3.3%）であった。『疑問』については講義型授業にのみ（2.0%）、『理解－』はグループワーク型のみ（1.7%）に記載があった。

表 1 授業形態別の学びの類型

| | 事実 | 理解＋ | 理解－ | 過去 | 願望 | 思考 | 疑問 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 講義型 | 14 | 17 | 0 | 2 | 3 | 13 | 1 |
| グループワーク型 | 21 | 18 | 1 | 4 | 2 | 14 | 0 |
| プレゼンテーション型 | 18 | 17 | 0 | 0 | 9 | 10 | 0 |

対応分析により、授業形態別に学生と学びの類型をマッピングした結果を図 1 に示す。各受講生のリアクションペーパーに含まれる学びの類型の数をバブルの大きさで表している。なお紙面の関係で講義型の授業は除く。

図 1 「学生」と「学びの類型」の関連構造




## 【考察】

今回リアクションペーパーから学びの可視化を試みた。どの授業形態においても『事実』『理解＋』が目立ち、受動的な学習が中心と思われるものの、教示により『思考』の表出もあったと考えられる。グループワーク型には『事実』と『過去』を結び付けた学びの特徴があり、気づきを得られたことが窺える。またプレゼンテーション型では授業の最終の締めくくりとして、「今後こうしたい」という目標を獲得し『願望』が発展的な学びにつながっていると考えられる。『疑問』はわずかであったが授業から具体的に自分で『思考』を働かせ学習を進められた可能性もあり、講義内容に対して持った『疑問』を解決する姿勢をもつ学習ができるよう、学生の興味関心を引き出す授業を目指したい。